

抒情詩叙事詩起源の先後

無 何 有 郷 人

抒情詩叙事詩何れが先なりやとの議論は頗るデリケートな問題で何人も少しも弱點を感ずる事なくして甲こそ先なれとか或は乙こそと斷言し得る者は無からう。余自身も未だ何れに左袒す可きか決し兼ねて居る次第だが兎に角此問題に關して如何様な議論が有るかを諸子に紹介する事が出来たら夫れで余は満足するのである。だが三十分内外との委員諸君よりの希望もありますから只さへ面白からぬ事柄が輪郭的に流れシエマチックに傾き愈よ以て乾燥無味になる恐れが有るが止むを得ぬ事と大目に聽いて貰ひたい。

大体抒情詩を先きとせる者は直覺的基礎に其論據を置き叙事詩を先きとなす者は實証的理論に趨るの傾向が在る。詩經の如きは感情的詩藻に富むで居り支那では最古の書の一なればとて是をこ楯に取つて抒情詩こそ先きなれと言ふ人も有る様だが同書は單に抒情一偏のものに非ず、依りて以て斷ずるは蓋し危い哉であると惟ふ。仲々に叙事詩的エレメントも見受けらるゝから。西洋にても然し抒情詩を以て詩中の最も古き種類と看做す人案外多く此主張こそ尤も廣く擴かり居る様である。蓋し人間に最も密接最も近縁なるものは自我 (Ego) に若く者は無い。従て感情ばかり容易に且つ速に人をして作詩せしめ、詩興を誘起せしむる者はない。かるが故にエゴの詩 (Die Poësie des Ichs) 感情を中心とせる詩なる抒情詩こそ歴史的に最古に發生せる者ならめと斷定するに外ならぬのである。

此主張は一見正誥を待て居る様に思はるゝが事實を無視し人間の發達進歩の跡を顧慮せざる缺點が伴ふてを

る。少しく歴史に鑒み詩本來の面目に考證すると叙事詩こそ最も早く起り、次に抒情詩、尤も後れて戯曲と言つた順序らしい。

此斷案を証明する道に内外二種あるのである。先づ外的のより始むる事とする。

第一 外的証明

外的証明とは畢竟史的証明に外ならぬのである。是に三種類ある。

(一) 一現存せる古代の石碑等より

獨逸國に就きて之を見るも僅に残存せる太古の石碑文は叙事詩なのである。碑文は元來叙事詩的な者と言へば夫迄だが碑文にも後世のには随分抒情詩的のも無いではない。獨乙國以外の國のも同様だと推察する。

(二) 古代の詩歌より

獨乙文學にて吾人の知れる範圍内に於ては最古の詩は舉りて叙事詩也。即ち第八世紀の「ヒルデブランドとハアデブランドの詩」を始めとし第九世の「世界破滅の日」其後に至りては「ニイベルンゲンリイド」「グウズ、ルンリイド」の如き皆立派な叙事詩なのである。無論抒情詩的な箇所のあるのは否定しないが。翻て獨乙國民の歴史を繙くと同國民の生れ出でたのは八世紀九世紀の後でない。更に遠く溯及し得るの國民である。獨乙人の歐洲に於て地歩を占め彼等民族の所謂最根本狀態ウルツワスタンドとも見る可き古代に迄溯り得るのである。即ち獨乙民族の最根本狀態時代の文學的作品に就きて見るに其ラン、ゴバル、デン、たる、ゴオ、テン、たる、將た日耳曼民族たることを問はず何れも同様の現象を見るところである。有名な羅馬の史家タシタスガゲル、マニヤに徴しましても齊しく亦。

此る一般的問題に對し一獨乙民族の文學史にのみを根據として斷ずるは危險なれば少しく他國民に就きて果して同一現象ありや否やを參考せなければならぬのである。傳聞する所に因ると希伯來文學にても詩形の發明せらるゝや神ワルミキに命じ叙事詩ラマヤナを作くらしむとあり。其昔ゴオル人が哥人して糸に合はさしめしも武勇傳たり。希臘にても詩星ホーマアの物せしもの専ら叙事詩であつたのであります。「イリヤス」「オヂゾイス」何れも皆。

(三) 神話に徴して

も詩の始めは叙事詩なる事想像に難くない。詩聖ホオマアはヘルメスを最初の詩人として表はすと同時に叙事詩人を以て目して居る。其ヘルメスは其兩親ツオイスとマヤの愛を歌ひ、彼自身の生れを詠じ世界の創造、八百萬の神々の成立、神位神徳を讃むる等總て叙事詩であります。日本古事記神代の卷は神話もて目す可きなるが無論抒情詩的分子の散在せるあるは否定し難き事實なるも大体に於て大八州の成立史といひ幾柱かの神々の出産おれこの物語といひ天照大御神アマノミコ天石屋戸アマノイハヤドの段といひ、はた速須佐之男命ハヤスサノノミコのやらはわて、出雲の國肥の河上なる鳥髪トリカミの地に降りましと條下と言ひ皆好箇な叙事詩と言はざるを得ないのである。

問題が普遍的、一般的性質の物だから外的証明は各國に通じ極力多く材料を蒐めてから歸納せないと或程度以上は類推が叶ふとしても随分獨斷的な弊に陥り易いが元來淺學非才の上に現下時間が許るさなから此以上は史に徴する事は御免蒙る事として偕て次は

第二 内的證明

(一) 一心の向ふ順序より見ても

人の事物を觀察攻究する自然の順序に見よ。小兒の遊戲に留心せよ。彼等は先づ外界に向て眼を注ぎ心裡を省る者希有では無いか。視線を自然に放任せむか向ふ所は遠方に在りて近所に非ず。若し必要ありて近處を觀むと欲せば眼を役する事却て多くして視神經の疲勞を感ずるや一倍であります。聖書に「汝兄弟の目にある物屑を視て己が目^に在る梁木を知らざるは何ぞや」の警句がある。移して外界の事實の比較的心的現象の觀察より容易なるを証するの文字とも見い得べきである。去れば哲學史を繙いて見ても最初は外界の觀察に重きを措ける自然哲學に瓶り希臘にては水を以て萬物の母と爲せるタアレスを開祖とし、空氣もて萬有の根元となせるアナクシメネスあり。印度にても大聖釋伽新に佛敎を唱道する前己に業に水を以て元素となせる哲人あり。空氣を以て夫と斷せし哲學者あり。何れも皆眼を遠く外界に注ぎ未だ深く内省の域に達せざりしを見る可きであります。然れど人類は進歩的也。終始物界の現象にのみ注意する者に非ず。地水火風などに萬化の根本を求めし者も漸く内省的となり、昨の臍白小僧の一重に他を排し唯我獨尊又何物をも恐れざりし者が、今は僅かながら自己の何物なるやに想到し幾分反省の氣味合一となる。人生哲學此處に生れ、青年は爰に人生問題に觸れ煩悶又煩悶或は自忘自棄に流れ或は厭生觀に陥るのであり升。蓋し「エゴ」の觀念が聊か眞率に心裏に頭を擡げ出した時なのです。更に一層進むで止みませんと畢に認識論に移り、研究は純のまた純、哲學的々の處に足を踏み入るゝ事となるのであります。素より自然、人生、純正哲學と截然相分れ毫釐も其間に混合する無く此順序を追ふて發展する者で無い事は敢て智者をまつて後初めて知る譯ではありませむが、外部的より次第に内部的と大體に於て此徑路を採る事は人の頭は由來簡より繁に、粗より密に、易きより難に進むで止まない者である以上穩健な考へ方と思はれる。

所で抒情詩の中心は「自己」であります。自己の感情であります。叙事詩の方は反之詩人の立脚点は主觀的で無く客觀的なのです。其材料其對象の範圍は身外に横はつて居るのであり升。活動する心の働きも主として想像力であります。感情を主要とする抒情詩にありましては、縦合感情の波を動搖さす刺撃物が外界に存在してをりまして、開は誘因に過ぎないのです。依然領域は内界であります。自己を通さなくては何處迄行つても完全の意味に於ける抒情詩には成らないのです。其處で人間頭腦の機能が先づ外に向つて働く者どすれば——人間一人の發育にまれ又人類全体の發達する道行に照らしてもが——叙事詩こそ先づと斷定せざるべからざる事となるのです。

(二) 自我感念未だ發生せず

一國民にして未だ自然的狀態を閱みしつゝある者、將た自然的狀態を相距る事遠からざる者に在つてや、其實未だ獨立的生物として、箇體として獨立獨歩せる者ではありません。勿論一箇人たるの自覺心のあるでも無ければ又何等自由意志の道義的に存在して居る譯でもありません。本能の命するまゝに行動するか或は夫に差をかけた位の所なのです。換言すると只漫然團體の——其一部落たるを國家たるを問はず——附屬物たるに過ぎ無いので、單に團體の爲めに働き團體と生死するが關の山であります。如此自我感念充分發露せざる幼年時代青年時代に在りて自己を中心とし感情を種とせる抒情詩の發芽せむ事は期待に難き事である。人智啓發せざる時代の民は所詮近代人士の如く感情鋭敏ならず。宛も大正子ながらポット出の書生山出しのた三は人の前ではらくする様な無禮を演じて平氣なるが如く、到底現時の巴里の婦人に見るが如き微妙精緻の感情は覺醒しをらないのである。恁る時代に偶ま情感の過敏なのがあつても夫は歌ふよりは寧ろ叫ぶの

である。絶叫するに終るのである。夫が社會が愈よ進歩し、道義觀念高まり國家と臣民との關係又昔の如くならず。上下權利義務を唱道するに至り、茲に自覺心は高まり、箇人思想は萌芽し自我心強大となり感情は銳利を加ふ。

かくなりてこそ「エゴ」の詩なる抒情詩の花は開發するのであります。蓋し箇人が箇人としてどは無く團體的と申しましたやうか一族、一國民全体が客觀的に露はれて居りますのが古代の詩で、今は即ち叙事詩であります。御覽なさい古代の詩に現はれます人物の性格は類型であります。決して箇性でありませむ。殊に女姓の箇性の發揮を見ますのは、すつと後の事です。其後國家生活が稍や精巧となり人の感情が發達しますと茲に感情詩が出現するといつた順次です。

(三) 一にも神二にも神

古代蒙昧の時代は勿論未開半開の時代に在りまして人間は以て生れた宗教心の爲めに拘束せられまして一にも神二にも神に依り頼みまする結果自己と言ふ感念が少なからず成長を阻害せらるゝのであります。一莖の若草の萌ね出づるに見ても、一葉の風に翻るに見ても其他吉凶禍福榮枯盛衰にも一重に神の御業みわざを觀るのみで只々人は奴隸的に畏伏服従します。従て國民の淵源にしても、人類全世界の成立にしても、有象無象何にまれ神意を認めて又他あるなしであります。斯く徹頭徹尾神に盲從して居りまして甚麼して自己が發現しませしやう。従て此全然自己を没却する事、神に深く深く歸依するの外又何物をも認め得ざる事は上述の理由に因りまして抒情詩の發生を遅延せしむるのであります。

此以外にも一二此派の説を證する論據はありますがあまり有力とは思惟しませぬから省きます。

要するに虚心恒懷兩派の主張を比較しますと何れにも獨斷的の所もあり早計と考へらるゝ所が籠つてをりま
す。开は兎まれ大体題目に對し兩派の懷抱する所は了解になつた事と信じますから之にて段落をつくる事と
致します。

サンヂカリズム及其沿革

下 林 一 之

サンヂカリズムとは、勞働組合の力により又はその司配の下に黄金時代を現出せしめんとする方法である。
これは勞働社會即ち第四階級の正當の權利を確保するといふ事は、たゞその勞働社會自身の獨立にして強壓
的な努力に俟たねばならぬといふ考に基いて居る。

それで、この主義は社會文化の比較的後期に在いて漸く現れ得るものである。初期の歴史に在いては勞働
する人々は全く存在を認められて居ない。差別は原始の社會の特徴である。筋肉が強く、齒や爪の鋭い獸の
様な奴等が、鐵の棒をふりあげて弱く同胞を壓服したものだ。少し後には降神術者と云つた様な神秘の方を
持つた人々が、色々恐しい儀式を行つたり何かして奇怪な勢力を占めて居た。何れにしても兎に角被治の多
數は統治する少數の下に有つた事は疑はれない。我々がサンヂカリズムを研究する時には、如何にしてこ
の被治の多數即ち第四階級が公然と團結し、我生命はわがものなりと公言するを憚らない様になつたかとい
ふ經路を調べるといふ事は極必要の事だと思ふ。

歴史の初期には第四階級は存在を認められずして汲々と働いた。彼等はかのファラオの陸を築くために